



海の組

菊池フジノ

この組では、昨年春から、お人形のお家を中心としている。三月の學年末までにお人形のお家がまあ完成したと申しませうか、この四月からは、そのお人形のお家の外庭の方の仕事にかゝつて居ります。外庭の方は、先づ垣根を拵へ、犬と犬小屋、それから馬や牛や豚を拵へる豫定です。そしてお馬には馬小舎を、豚と牛には柵をめぐらさうと思つてゐます。それから大きな庭樹を二三本立て、その葉や花をみんな拵へるつもりです。尙ほ之につゞいてる計畫は澤山ございりますが、長くなりすから、こゝには申上げません。で、四月から只今までに垣根が出来ました。そして之にバラを這はせてゐます。このバラがまだ只位出来ただけです。それから、お馬も出来上りました。馬小舎は出来たばかりで、その中を塗るつもりです。それから豚は二つ出来た所、犬小屋も出来、犬は顔だけ出来、胴は今から作る所です。形が出来ると子供等は、塗り度いとせがみますのを、塗料の關係で今まで待たせてあつたので、今度塗る豫定に入れました。毎日午後にはこのお家の仕事を致しますが、都合によつて出来ない事もございます。之だけを申上げて、この週の日誌の不明を御諒解願ひ度いと存じます。

——編者申す。菊池氏の人形のお家に就ては本誌前號を参照されたし

豫定

お唱歌 ひばり (野口雨情歌、室崎琴月曲)

お遊戯 フランスの王様 (新教材) その他

お人形のお家作り 豚塗り、鳩のお家塗り、犬

小屋塗り、犬作り

水曜

人形のお家——庭木の葉、作りぬりゑ けし

木曜

お唱歌 電車と汽車 (新教材)
粘土 明日の海軍記念日にちなみお家
人形のお家 室にある軍艦を中心に軍艦を

金曜

おはなし (H實習生) 火燧石
人形のお家 立て繪——火燧石の木、人物の色塗り、

火曜

子供等との語り合ひ
自由畫 (本校園藝場にてけしの寫生)
人形のお家

土曜

おはなし (N實習生)
人形のお家 立て繪——火燧石。木、人物の切抜き

この他 雨の日に——人形芝居

静かな日、折を見て——レコード演奏

五月二十三日 (月)

何となしに雨をはらんだ空合。お室へ来てバスケットをお辨當戸棚に入れるなり子供等はさつさとお庭へ行く、一群はボール投げに、一群はブランコに、また四五人は實習科生のお庭掃きのお手傳ひに。

家塗り その中、今朝溶いて置いたそれ／＼の塗料が程よく溶けたので、先週中かゝつて作つた箱の豚二匹（みかん箱に四隅から四本の足をつけそれに頸をつけ、顔をつけたもの）大小屋、鳩小屋が夫々の受持の實習科生によつてお庭へ運び出された。豚は薄桃色、大小屋は薄緑、鳩小屋は黄色に。つゞいて鹽に浴いた夫々の塗料も運ばれたので、子供達は立ち處にそこへ集つて來た。

「塗らせて」

「塗らせて」

あつちからもこつちからもこの聲。代り合つてみんなで塗つた。この様子をアルバムの一頁に加へんと、急ぎカメ

ラに納めた。濟んだ人達は次から次へとシーソーに、滑り臺に散つてゆく。この間、實習科生に、五六人の體格検査未済の子供を小學校の醫局に連れて行つて頂く。塗り終へてからお遊戯室に集る。

唱歌 ひばり、先週から歌つてゐた。この歌は、ハ調のミまでであるので、そこを出すのに無理な子もあつた。自分でもして見てあんまり氣のりがしなかつた。思ふ様によく歌へる様になつたわけではないが今日でおしまひにする事にする。つゞいて遊戯。

遊戯 實習科生がこの間中お習した『フランスの王様』と云ふのを教へていたどく。リズムに合せて動作をするので、歌は無い。今までのと變つて横列になつて進むお遊戯なので、子供は一入珍しがる。十人位づつ一列になつて、幾回にも分れてお習する。今日は大體の型だけをおぼえて貰つた。それかちポートルース、汽車、飛行機、シヤボン玉蝶々、スキップ等をいつもの様にする、

お遊戯がすむとすぐお晝のお仕度。

お辨當

午後は、おひる前に塗つた豚が乾いたので、傍で眺めていた園子さんに、薄黒で目を書き入れてもらひ、桃色で鼻を塗つてもらつた。男の二三人と女の子等はお人形のお家を中心にたまごごと。男の元氣な一團はボール投げに餘念がない。やがて一時二十分頃になつたので、各團を廻つて今週はお外のお當番である事を申渡し、お片付けに取りかゝつた。彼れこれ遅れて、お歸り一時半の所が一時四十五分頃になつてゐた。

五月二十四日（火）

昨日の雨ですつかり清められたすが／＼しい新緑の朝。子供達の足も自づと外へ向く。一團はお砂場に、一團はブルーコに、一團は石けりに、もう餘念がない。私は、どのグループにもは入つてゐない四五人の子供達と、一ヶ月許り前に蒔いたねむり草の鉢植の、雑草ぬきにとりかゝつた。「かうしてこの葉つばにさわつてごらんさい。つぼみますよ」

と云へば、みんなは「かういふ風に？」

ときゝながらさわつて見る。と、思ひがけなくも、シューツとつぼむので、みんなのよろこぶこと一通りでない。二人來、三人來していつの間にか組の大部の子供が集つてねむり草に興がつてゐた。

その中、どこかの組で藤棚の下に机が運ばれて粘土が始められた。子供達の眼は一樣にそちらに向いた。そして、「僕達も何か」と云つた様の表情が、かすかに動いた。で私は、

「海の組の方も本校のお花畑に行つて、けしの花を描きませうね」

と云へば、本校と云ふ言葉に惹きつけられた子供等は、

「海の組本校、海の組本校」

と叫び出した。

一行は二十三人、初夏の、しかも雨後の強い陽を浴びながら、手に手にクレヨンとお帳面を持つて行く。今を盛りと咲きほこつてゐるひなげしの寫生——之が私の心組みだつたのである。

ひなげしは、園藝場の最も奥の所にあつた、その場所へと進んでる中、手前に薄く赤らんだいちごの、粒々として

ゐるいちご畑が目についた。子供等の興味は、俄然いちごに變更してしまつた。

「僕、いちごを寫生しよう」

快活な徹男さんが口を切つた。すると、

「僕もいちご」

「僕もいちご」

「わたしもいちご」

「わたしも」

「わたしも」

と潮の押し寄せる如くに私に承諾を得に来る。

「けしにしよう」

と云つて、けしの所へ行つた人は僅かに五人だけ。

しばらくの間は靜肅が続いた。やがて、

「僕、出來た」

と云つて見せに來た。徹男さんである。上の方にも根元の方にも、もや／＼してゐる葉があつて、その間の草に、ぐみの様な赤い實が左右相稱に六つばかりなつてゐる繪である。徹男さんと、も一度葉を上げたり下げたりして實のなり所を見たり、葉の形や、葉の出所を見直した。そしてま

づいながら餘白の方に鉛筆で書いて見た。

「うんうん」

ときいてゐた徹男さんは、濟むなり、直ぐそこへお帳面もクレヨンも置いたまゝ、シャスターデジの一面に咲き亂れてゐる方へ向つた。と、そこで一聲、陽氣なあの大きい聲で、

「あぶがゐるよ!! 澤山ゐるよ!!」

と叫んだ。

と今まで黙つて畑を見ながら書いてゐた子供達が急にざわめき出して、

「出來た」

「出來た」

「僕も出來た」

と急に忙しくなる。ちやんとよく見て書けてるのが五六人あつたが、大抵の人は葉の形、出方、實のつき所等をはつきり見てゐない。さつき徹男さんにした様に、出來るだけみんなと一緒に、又見直した。けしの寫生の人達は、どうにかよく見て描けてゐる。みんなは、私に見せさへすればお帳面もクレヨンも帽子もそこへ置いたまゝ、急いでシ

ヤスターデジーに飛び交ふてる花蛇の方に向つた。

「僕二匹取つた。」

「僕三匹！」

と一時はお花の存在があやぶまれる程蛇取りに熱中した。

「蛇を入れる封筒を持つて来ればよかつたわね」

と云へば、

「いゝよ、僕紙に包むから」

「わたし紙に包むわ」

と云ふ。

「みんな取つたのを幼稚園へ持つて行つて硝子の器に飼ひませうね」

と云へば、それがいゝ、それがいゝと、益々一生懸命になる。龍太郎さんが取つた蛇を水蓮の鉢につけてやると云つて入れる途端に、ふと水蓮鉢の中のボーフラを見つけた。そこへ三四人の子供もかけつけた。恒幸さんは、

「あゝ根切虫が居るぞ」

と云ふと徹男さん

「馬鹿云ふな、ボーフラぢやないか」

と云ふ。ボーフラを知つてる人があるかしらつと思つてゐたのによく知つてゐた。それから私は、ボーフラは蚊の赤ちやんであること、汚い水に生れること、時々面白い恰好をして浮んで来るのは、息をしに来るのだと云ふ事等を話した。子供等は聞きながら暫く見入つてゐた。こゝへいちごの後も尚ほ寫生を續けてゐた四五人がやつて来た。そして、

「僕の書いたお花を見せて上げるからこつちへいらつしやい」

と云つて私をひつばつて行く。そして、

「かさ／＼してゝとつても面白いよ」

とさわつて見せる、

「何と云ふお花？」

ときく、私は

「貝殻草よ」

と云つて一緒にさわつて見た。茂さんは自分でお帳面にカヒガラソウと書いて、之はこの花、これはこの草と一々説明する。こゝへボーフラの所の連中が後から後からやつて来て一様にさわつて見て興がる、それからみんなで花畑

をあるいた。麥があつた。麥を知つてゐる人は無いだらうと思つてゐたのに徹男さん、

「先生これ麥だらう？」

と云ふ。

「えゝさう、よく知つてゐらつしやるのねえ」

と云へば、

「そうさ僕田舎へ行つたんだもの」と答へる。

「皆さんのお家で麥御飯召し上らない？」ときくと、明雄

さんが、

「僕の家麥御飯だよ」と云ふ。

「その麥はこゝの所よ、それから輪通し等に使ふあの麥わらはね、こゝの所をよく乾して色々の色をつけたのよ」と云ふと子供等は、こつくりと頷く。それから空豆を見、てんとう虫を二三種取つて、いつも兵隊ごつこをする本校の丘へ行く。行きつくと否やすぐ、兵隊ごつこが始まる。

今日は武器なしの兵隊さん達だ。片手を廣げてドン／＼と云ひながらかけて歩く。この手にさわつた人が戦死するのである。バタ／＼と二三人の人が忽ちクローバーの草原に倒れる。誰かど「赤十字!!赤十字!!」と叫べば、軍醫

にされた茂さんが、そこに居合せた三四人の女の子を看護婦にして介抱に行く。看護婦さん達は手をさすつたり、肩をさすつたりして介抱する。その中、軍醫さんが「いゝんだよ」と聲をかけると、戦死者は堯爾として起き上り、次の戦争に加はる。かうしてもものゝ三十分も遊びは續いたであらうか、その中、何やら軍醫さんを中心にいさかひが起つた様であつた。みんなは茂さんに草の葉つばをぶつつけたりして挑戦し初めた。私は切上げはこゝとばかりに、

「さあ、お辨當のお時間になりましたから幼稚園へ歸りませう」と云つて、クローバー摘みに夢中になつてゐる人達、クローバーの寫生に耽つてゐる二三人を誘つて歸つた。

強い日光に射られて子供等は疲れたのであらう。取つて来た、蛇やてんとう虫を入れた硝子器の周りに、腹ん這ひになつておとなしく見てゐる。私はお辨當のお仕度に取りかかつた。子供等は一人立ち二人立ちして、馬小舎からお馬を引き出してお馬乗りを始めた、小馬も、大豚も、小豚もお尻に鞭あてられてゐた。

お辨當。

午後は、子供等は夫々思ひ／＼のグループになつて遊ん

でゐた。女の子の四五人は例によつてお玄關で石けり、男のおとなしい五六人は賣店への互り廊下でかくれんぼ、男の元氣な七八人はお砂場で。

次いでお片付け。

お歸り。

今日は寫生に行く前に子供等との語り合ひをする豫定であつたが、子供等の顔に動いたかすかな表情をつかまへてお繪書きを始めたので、この機會を得ずにしまつた。併し語り合ひの内容は、自分の心持ではお花畑で子供等の見た、語つた事共も含んでゐたので、悔いはしない。

五月二十五日（水）

風強く落ちつかぬ日。

實習科生が拵へて置いたのであらう。衝立にかけてあつた五六組のやじろうべいを、朝、お室へは入るなりすかさじ發見して大悦び。おつむでも立てられると、誰かゞ自慢すると、いや、指先でも、爪先でも、お鼻の上でも出来るると自慢の仕返し。朝のしばらくは、これに打興じる。私は昨日用意して置いた、緑の模造紙の二枚貼り合せたのを出して

椿の葉を切り始めた。やじろうべいに見惚れてゐた五六人は、「何するの？」とよつて來た。

「あの太い木（お人形のお家の庭木）の葉にするの、手傳つて頂戴、椿の葉よ」と云へばみんな喜んで鉄を出しに行く。

「かういふ形？」「これでいゝ？」と口々に聞くので、お庭へ行つて椿の小枝を取つて來て、机の上に置いた。みんなはそれを見て切り、おまけに、葉の真中から縦に二つに折つた。葉脈の所で折目のついた様になつてゐるのを表はしたのであらう。それから女の子は、バラの葉も拵へると云つて、（お人形のお家に垣根をこしらへ、それに花をつけた。バラを遣はせた。今漸くいすばかり出來たところ）作り始めた。（針金四寸程の長さに緑の紙を巻いておく。子供等は之につける葉を切り、之を二枚糊で合せながら針金に左右につ）七八人の男女の子供達はこちらにはお構ひなしに、

お人形のお家のお馬や豚や垣根を、好きな所に並べ代へて、自分等が乗つたりお人形をのせたり、お家へはいつたり出たりして遊んでゐる。やじろうべいの一團も流石にあきたのか、それを机の上に置いて、椿切りにやつて來た。しばらく切りつゞける。やがて、もうおしまひ、と云つてみんなは去つた。次いで私はお人形のお家の人達を誘つた。

「嫌！」とにべなく断られた。「あらメリーさんはね、よくこのお家に手傳つて下さる方だけがお遊びにいらつして下さい、と云つてましたよ」と云ふと、仕方がないと云つた表情で缺を出して來た。そしてほんのお義理に、三四枚の葉を切つてはまた、元の遊びに歸つて行つた。お仕事の跡を片付け、今朝用意した、けしの花の花瓶を子供等の机の上に置いて、私も子供等の後を追ふて外の空気を吸ひに出た。見ると、元氣な一團は、龍太郎さんのリーダーの下にかけつゝ最中。他の五六人は茂さん指揮で賣店から小學校の校舎にかけてかくれんぼ、女の子の四五人は例によつて石けり、すうつと幼稚園のお庭を一周りしてまた私はお室へ歸つて來た。時に十時十分過ぎ。丁度こゝへ、〇〇さんが例によつて「みんな僕を入れてくれない」と訴へて來た。この人は、豪傑組からは除外されるし、と云つておとなしいグループへもは入れず毎日ベツをかいては不平をかこつ人である。或る日のこと、七八人がお砂場に大きなトンネルを作り上げて、今から積木の汽車を通さんと意氣込んでる時、突然そのトンネルを崩して「止ーした今度はお團子作りをしよう」と叫んで、そばの茂さんから「〇〇ちゃ

ん嫌だなあ！君、そんな事するからみんなから憎まれて馬鹿にされるんだよ」とたしなめられてゐたと云ふ。又或る子は「〇〇ちゃんは生意氣だから嫌ひさ」と云ふ。嫌ひ子供等にも理窟があるかと思はれる様になつた。で、この頃はこんな言動を見る折々に宏ちゃんをたしなめ、同時にこのグループ外の他の人達と遊ばせる様努めてゐる。筋は大部とんだが、宏ちゃんの不平を聞いて、折柄お室へは入つて來た義雄さんと二人に「けしのぬりゑをなさらない？」と云つた。二人は快く「うん、しよう」と云つてお帳面を出しに行つた。そして3の字のお帳面？ 2の字のお帳面？ ときいた。(ぬりゑの二號と三號を各々に備へておくので) 2の方と答へておくと、さつさとお花を圍んで始める。こゝへ、人形のお家から三四人出て來て加はる、又三人加はる。しばらくしんとしてゐる。——もう先に塗り始めた人達は「出來た」「出來た」と見せに來る。塗り繪は誰もが大好きで、よく塗れる。時々筆を忘れたり、花びら一つ位を忘れたりする。こんな時「こゝは？」と聞くと、子供等は、「あゝさう」と直しに引き返す。

こゝへ、今日の家庭教育相談日に倉橋先生に伺ひ度いと

て來園された、こゝの組のお子さんのお母様がいらした。今朝九時に見えられたので、只今お済みになつたところである。今日伺ひに來られた點は、この組へ來ていらつしやる

お子さんは、このごろ非常に物に凝り出して、自分のやうとする事柄ですと半日位没頭するし、夜などであると益々眼が冴えていつまでも眠くならない、いろ／＼止めさせる様に努めて見るがどんな事してもまぎれない、あたり人は、今の中からこれぢや、もう神経を費ひ盡して父親の様に（早世された）なつてしまふと心配して呉れる、果してどういふ風にしたらいゝものであらうか伺ひ度いと云ふのであつた。先生から教へて頂いた事をあれこれと私に話なすつたので、私も子供を見ながら伺つてゐた。ふと見ると、かけつこから滑り臺に轉じてゐた一團が、いつの間にかは入つて來て靜かに塗つてゐるのである。この人達は塗り終へると、又馬乗りを始めた。女の子の三四人は、さつき婆やが配つて行つたお机バケツ、お盆ふき桶から、夫々巾布を絞り出して、お仕度をしてゐる。十一時半も過ぎてゐたので、私もお客様とお別れして、お仕事の後を整

理したり、この人達に手傳つたりして間もなくお辨當にした。

午後は、三四人の人達と私とは馬小令塗り（綠色）他の人達は夫々思ひ／＼の外遊びをなす。

明日の準備——明日新しくするお唱歌「電車と汽車」の繪と歌「片假名」とを黒板に書いて置く事、之は實習科の仕事としてHさんに當る。

五月二十六日（木）

來る人、來る人、目新しい繪と歌が黒板に書いてあるの
で、誰でもがそばへ來ては、繪をよるこび、歌を遣つてよむ。いつの間にか十五六人はお遊戯室でお相撲を始めてゐた。土俵なしのお相撲故、私はこゝに付ききつてゐた。二人の男の子と、女の子の大部はお人形のお家遊び、——今日は買物ごつこである。伊勢丹や松坂屋へ行つていろんなものを買つて來る。——たゞそれだけの事なのに、大變喜んでみんなで出たり、は入つたりしてゐる。

九時半過ぎ、ピアノを開けて「電車と汽車」の歌を弾き出したら「海組お遊戯かい？」と、いつて二三人はお人

形のお家に遊んでゐる人達をお迎へに、他の二人程は、お外で小さい組と遊んでいた園子さんをお迎へに行く。みんなが集まつてから、この歌を二三度弾いたら一緒に歌ひ出した人もあつた。「この歌知つてゐらつしやる？ 黒板に

面白い繪が書いてあつたでせう、あの歌よ」と云へば「一度見て来る」とみんなはお室へ引返した。それからピアノ無しで歌だけを「チン／＼チン／＼デンシャサン」「オマへハホントニイサマシイ」「……………」と口ずさんで見る。子供等も喜んで一緒に云ふ、歌詞が説明なしで了解が出来るのは一番わけもなくおぼえてしまふ。それから又今の様に「ゴツトン／＼キシヤサンハ」と二番も二三度口ずさむ。之もわけなくおぼえる。それから一緒に三四度ピアノで歌ふ。伴奏をつけても惑はない。次に女の方だけ、次に男の方だけ。次は一番の電車を女兒、二番の汽車を男兒代つて一番の電車を男兒、二番の汽車を女兒と云つた風に、都合四五回も繰り返したであらうか、もうおぼえてしまつた様だ。それから「一人で歌へる方？」ときいたら大変な志願者である。二三人づつかためて一互り又歌ふ。それから前の「ひばり」の歌を二度ばかり歌ひ、つゞいてお遊

戯に移る。こゝへ、研究科の支那留學生。さん来る。時々はいつて一緒になさる。

お遊戯は始めにこないだの「フランスの王様」をした。やつぱり十人位づつ一列になつて。少し忘れかけてゐたが一二度したら思ひ出して、喜んでする。たど／＼しい恰存で、ちつとも勇んだ様子でもないのにとても嬉しいと見えて、わざ／＼列から離れて、「僕これ大好き」と注進に来た人が二三人ある、リズムがゆつくりしてゐて、堂々と進む所が氣に入つたのであらうか。これがすむとまた子供等の好むものを七つばかりする。

お遊戯が済んでお室に歸る。お遊戯室にはいる前にお粘土と板とを用意して置いたので、子供等はそれ等を見るなり直ぐ「お粘土だ！」と各々の抽出しまで、粘土べらを取りに行く。

「何でもいゝの？」

「好きなもんでいゝんでせう？」と口々にきく。

「さうね、あしたは」と云ひかけて研究科の方のいらつしやる事に氣が付いたら、あとは出て來ない。一寸もじ／＼したが、もう簡単に云つてしまつた。

「あしたは海軍記念日ね。ですからみんな軍艦を作りませうよ、そしてこの軍艦（お菓子屋で出している精巧な厚紙の軍艦）の周りに、ずつと浮かして走らせませう。それから東郷大將も作り度いなあ」と。

「出来ないなあ——六ヶ敷いなあ」と四五人は云つてゐたが、それでも殆んどの方は軍艦を造つた、いろ／＼の軍艦があつた。精しいのも簡單なものも。大きいのも小さいもの。之を机に一列に並べて、其間に大きなお室にあつた軍艦を中心にして並べて見た。時間があつたらそれにつゞく黒板にもこれの延長を描いて貰ふ積りであつたが、遂其機を得ずには急ぎお辨當のお仕度に取りかゝらねばならなかつた。午後は、男の子等は櫻の木の毛虫を發見してその退治に大わらわ、女の子等はお人形のお家で遊ぶ。

明日の準備——明日する豫定の火燧石の繪を謄寫版ですること。昨日する筈の所、器があいてなかつたので、

序に一寸御紹介させて頂く、アンデルセンの火燧石を三週間ばかり前に話して見た、大變によろこんだ。その時、フト魔法のお婆さんと兵隊さんとが穴のある大木を背にして會つてるところを立繪にしてはと思ひつ

いた。で之を實習科の方に大體の組立てを示して考案方を宿題にした。それが出来たのである。今週も一度お話を繰り返していたゞく事にした。それは六七本の大木——穴のある大木も——を立てゝ森を現はし、その中に途をもつける、その途でお婆さんと兵隊さんがお話してゐるのである。で都合六七本の立木と、魔法のお婆さんと兵隊さんの二人物を刷るのである。

五月二十七日（金）

今日は二月以來ずつとお休みであつた裕久さんが來られた。子供達はなつかしがつてみんなにこ／＼して寄つて來て、下駄箱はこゝ、お帽子掛けはこゝと、手を取つて小さい組の時と變つたと教へて歩く。お庭へも手を取つては、連れて行くと云ふ有様。——と云つてこの人はよち／＼さうでは決してなく、豪傑組の一人である元氣旺盛のお子さんであるが、長いお休みに、吾が子は如何にと案じて送つて見えられたお母様も嘸かし御安心、お嬉しく入らしつた事と思ふ。

九時過ぎ、みなさんの揃つた、そして靜かな頃、實習科

生のお話が始まつた。「火燵石」のお話である。このお話は三週間程前自分が一度した事があつたので、お話の先々と子供達の心が進んで、暫しは驟然としてゐた。こんな場合の前以つての制し方を、實習科生に授けて置かなかつたのが自分の失敗である。が、やがて靜かになつた。このお話は分るかしら？と思ふ様な幼い子供にでも、よく了解されてゐるらしく、お話が濟んだ後、思ひ／＼してはポツリポツリと語つてゐた。

お話が濟んでから、實習科生が拵へて置いてある火燵石の立繪をみんなに見せた。みんなは、こないだから作り度いと云つて(置いてあつたのを見て、火燵石の魔法の)ゐたので(お婆さんと兵隊さんであることを知り)よくこんで賛成した。でも之は小人數づつ念入れに塗つて綺麗に仕上げて貰ひ度いと思ふので、初め女の方だけそのまま、居残つて塗ることにした。女の方達は、とり分け塗繪が好きで、又綺麗に塗るのが常であるが、今日はまた特別熱心でいつも仕事半ばで、どこへか姿を消す〇〇子さんまでが、私達が驚いた程の熱心振りを發揮し、一氣か勢に、しかも丁寧に塗り終へた。

男の人達は二人の實習科生と、お砂場での幅飛びに、お

相撲に、またはかくれんぼうに夢中である。

やがて女の方と交代した。男の方達も熱心である、がおしまひ頃に、少し飽き出した人が出て來た。お辨當に間も無い頃なので、飽きた二三人は明日に延した。

お辨當。

午後はブランコ遊び、虫退治等に吾を忘れて遊ぶ。

お片付け。

お歸り。

五月二十八日（土）

朝來るなり、四五人はお砂場へ。五六人は實習科生と鬼ごつこ、その他の人達は、實習科生二人ばかりが、昨日皆さんのした立繪を整理していらした傍へ行つて、塗り終へなかつた分を塗り足してゐる人も居れば、又昨日塗つたのを早や切つて、假に立て、喜んでゐる人もある。一人加はり二人加はりして、おしまひにみんなが昨日塗つた人物と木を切りにお室にはいつてしまつた。切りにくい所に、小刀で切目を入れて頂いたり、線の薄くて不明の所へ、ペンで書き入れて頂いたりしながら、暫く靜肅が続いた。かなり

澤山あるのに、みんな切つてしまつて立てゝ見たいと意氣込む人も居る、と思へば、もう飽きた！とへこたれる人もあつた。體の弱さうな人はさもある事と月曜まで延して上げたが、さうでもない方は、少し手傳つて上げたり助言して上げたりして、大抵は切り終へた。

この頃お室の一隅では、實習科生の指導の下に、お人形のお家のストーブの前の衝立て（もう暑くなつたのでストーブも要らなくなり、それを衝立て）のお繪描きが始められてゐた。——二三人代り合つて。他の隅の方では鳩小屋の主人公（先週鋸ミシンで切つた木の鳩）の彩色が二三の子供相手に進められてゐる。

お庭では今日ももう毛虫退治が始まつたらしい。大騒ぎをしてる聲がきこえる。女の人達は相變らず石けり。

その中十一時頃になつたであらうか實習科の先生のお話が始まつた。子供等は「海の組おはなし」と聞くと飛んで行く。之を見ると、あんなに亂暴な人達なのにと嬉しくなる。お話は「目つぶし」と云ふのである。初めてと、しかもお歸り間際の何となしにさわめいて居る環境だつたのにその割には子供達を惹きつけ得た。一つが濟むと、もつととせがんだ。併しお歸りの時間十一時半も迫つてゐたの

で大急ぎお片附に移つて、やがてお歸りにした。

今週は天候に恵まれて、雨の日に入れやうと豫定してゐたレコード演奏も一度もしなかつた。人形芝居も一度も見ないでしまつた。

日本幼稚園協會夏期講習會

本年は特に、音楽協會新編になる新幼稚園唱歌につき、其のうたひ方と新作の遊戲とにつき、最も新味ある内容を提供するものであり、多數諸君の御來會を希望します。

詳細は本誌廣告を御覽願ひます。